

<腸管出血性大腸菌(O157等)感染症> ~ 経口感染 ~

腸管出血性大腸菌(O157等)は、通常牛等の腸内に生息しています。そのため腸の内容物で汚染された食品を介して、口から体内に入ることによって感染し、下痢、腹痛、発熱、出血を伴う腸炎などを引き起こします。腸管出血性大腸菌は、ペロ毒素を産生するのが特徴です。ペロ毒素産生菌は、O157 が最も多いですが、O26、O111 などの型もあります。

感染経路

- ★ 食べ物（牛肉やレバーなどは十分に加熱しましょう。）
- ★ 生肉に触れた箸（焼く箸と食べる箸を使い分けましょう。）
- ★ 患者・保菌者の糞便で汚染されたものや水 など

※ 腸管出血性大腸菌はわずか数十個程度の菌が体の中に入っただけでも発症することがあり、患者・保菌者の糞便などから二次感染することがあります。

潜伏期間 : 2~14日(平均3~5日)

症 状 : 下痢(軽いものから水様便や血便)・腹痛・発熱など

※ 乳幼児や高齢者では重症になる場合があります。

※ 発症後1~2週間は、溶血性尿毒症症候群(HUS)を起こすことがありますので注意が必要です。

※ HUS : ペロ毒素により腎臓の細胞が傷害されて発症する、溶血性貧血、血小板減少、急性腎不全の3つを特徴とする状態。

主な症状 : 尿が出にくい・出血を起こし易い・頭痛など

重症になると、けいれん・昏睡を起こし、生命の危険がある。

【予防対策処置等】

1) 「Ⅲ. 感染症発生時の対応」を参照してください。

2) <具体的な感染予防策>

高齢者・乳幼児等が集団生活する場では初期の段階で二次感染を防ぐ必要があります。

① 手洗いの励行(排便後、食事の前など石けんを泡立てて手洗いする。)

② 消毒(ドアノブ、水道ノブ、便座などを消毒用アルコール、逆性せっけんを含ませたペーパーなどで清拭する。)

③ 食品の洗浄や十分な加熱

④ 下痢のあるときは、プールの使用、浴槽につかることなどはさける。

3) 激しい腹痛を伴う頻回の水様便または血便がある場合には、病原菌の検出の有無に係わらず、できるだけ早く医療機関を受診し、主治医の指示に従うことが重要です。

○ 腸管出血性大腸菌感染症は3類感染症で、診断した医師は診断後直ちに届け出ることになっています。